プラン・ニュース［2022 Spring］NO.119

PLAN NEWS

国際女性デー2022　スペシャル・トーク

「なりたい『私』になる！～女性がリーダーシップを発揮するために～」

プラン・スポンサーシップ

職業訓練を通じて未来を切り開く

スーダン

女性性器切除から女の子を守る



発行：公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン

国際女性デー2022スペシャル・トーク

なりたい「私」になる！

～女性がリーダーシップを発揮するために～

プラン・インターナショナルは、国際女性デーに先立ち、3月4日にオンライントークイベント「なりたい『私』になる！～女性がリーダーシップを発揮するために～」を開催。アジア開発銀行副官房長で、プラン評議員でもある児玉治美さんを登壇者に迎えて、女性たちがリーダーシップを発揮し、なりたい「私」になるにはどうすればよいのか、お話しいただきました。

アジア開発銀行（ADB）副官房長

児玉治美さん

聞き手：プラン・ユースグループ　大崎さん





3月8日は女性の権利と政治的、経済的分野への参加を盛り立てていくために国連が定めた「国際女性デー」

こだまはるみ：2001年から国連人口基金（UNFPA）ニューヨーク本部にて世界の議員連盟やNGOとの連携強化、緊急人道支援等に関わったあと、2008年アジア開発銀行に転職。マニラ本部で広報局や首席企画・政策専門官などを経て、2019年から駐日代表、2021年より現職。プラン評議員。日本経済新聞にジェンダー、ダイバーシティなどをテーマにコラムを連載。

〝「女の子だから」との理由で自分に足かせをはめない。何でもできると信じてみて〟

リーダーとしての経験を積むのが大切

国際協力の分野でのキャリアを積み、リーダーシップを発揮してきた児玉治美さん。ご自身の体験を交えて、性別にかかわらず誰もが等しく社会参加し、自分の意見を発言し、リーダーになる機会のある社会をつくるためには何が必要か、個々人が取り組むべき課題や社会的要因についてお話しいただきました。聞き手は、プラン・ユースグループメンバーの大崎さんです。

――プランは国際女性デーの3月8日に「日本における女性のリーダーシップレポート2022」を発表。そこでは、生徒会役員などの役職経験があると、女の子も積極的に意見を述べられるということが明らかになりました。

児玉治美さん（以下、児玉）　データ通りのことが起こっていると思います。女の子は、学校生活でリーダーとしての経験を積むと、将来リーダーになりたいと願う。逆に、小さい頃から「女の子は大人しく」という固定概念を押し付けられていると、自分はリーダーになれないと思ってしまう。そして「リーダーになれない」が無意識のうちに「リーダーになりたくない」に変わってしまう。女の子へのリーダーシップ教育の重要性が、もっと認識されるべきだと思いますね。加えて、大人の女性への教育も忘れてはいけません。実際、国連機関では、リーダーシップ研修を受けることを女性は特にすすめられます。

女性も男性と同じテーブルにつくことから

――ニュースでもドラマでも、メディアで目にする意思決定層は男性ばかりであると感じています。これが、「リーダーは男性」というステレオタイプにつながるのでしょうか。

児玉　そうだと思います。そういったステレオタイプは、男性にも女性にも刷り込まれてしまいます。

――ユース世代の女の子も、刷り込みや既存の概念にとらわれている気がします。脱却するにはどうすればいいですか。

児玉　ハッタリでも良いので、まずは女性である自分が男性と同じテーブルにつくこと。若い女の子が重要な会議で年配の男性と並ぶと、ギョッとされることがあります。そんな時は、自分がここにいるだけでも意義があると考えて行動してみてください。多くの女性たちと同様、私も長い間インポスター症候群※に悩まされてきましたが、堂々と振る舞うようにしたら、いつの間にか自分の力を信じられるようになりました。

そして、できれば多くの女性に会社のメインストリーム（主流の事業）にある役職や職務にも挑戦していただきたい。Meta（旧称Facebook）の最高執行責任者シェリル・サンドバーグが著書『リーン・イン』で主張したように、女性はもっと前に出る努力をすべきだと思います。

――「女性はリーダーになれない」というステレオタイプを押し付けられたら、それは事実ではないときちんと見極める。周囲の思い込みを聞き流すことが大事だと思いました。

児玉　差別的な発言を聞き流し、堂々と振る舞うのは確かに大切です。でも、ときには聞き流さないで、言い返すことも忘れないでほしいですね。私は、ジェンダー平等を掲げているのに会議の出席者が男性ばかりという企業と仕事をするときは、正直におかしいと伝えます。主張すべきことは主張し、小さくても変化は起こるからです。

――最後に、なりたい自分になるヒントを教えてください。私は中学生の頃から地球規模課題の解決に貢献したいと思っています。そういう自分になるために、どういう行動を起こせばいいでしょうか。

児玉　自分自身に足かせをはめないで、やろうと思えば何でもできると思うことが大切です。自分をとにかく信じてみて。応援しています！



対談はオンラインで行われました

児玉さんがさらにアドバイス！

なりたい「私」になるために心がけたいこと

1 必死に考えて意図的にキャリアを切り開く

どんな環境に身を置けば、仕事以外の大切なものを守りながらも自己実現できるかを必死に考える。理想の環境が整っている場所に移動する。それが大切だと思います。

2 答えが出なければ成り行きに任せる。でも、軸はブレずに

なりたい「私」を考えても答えが出なければ、成り行きに任せても。私はキャリアの前半部分は、積極的に就職活動をしたというよりも出会いや縁に身を任せました。そのような状況下でも大きな失敗をしなかったのは、「国際協力の道に進みたい」という軸がブレなかったからだと思います。軸さえブレなければ、人生何とかなります。

3 優しさは真の強さ。心の知能指数（EQ）を高める

心の知能指数（EQ）が高い人ほど、職場でも人生でも成功する可能性が高いという認識が広まっています。「優しさ」や「共感力」を大切にしてください。ドイツやニュージーランドの首相など、共感力が支持されている女性リーダーが増えています。優しさこそが真の強さであり、これからの時代にもっとも必要とされると思います。

※インポスター症候群
成功していても、「これは自分の能力や実力ではなく、運がよかっただけ」「周囲のサポートがあったからにすぎない」と思い込み、自分の力を信じられない状態のこと。女性やマイノリティに多いとされている。

「日本における女性のリーダーシップレポート2022」を発表

「日本における女性のリーダーシップレポート 2022」は、中学校・高校に通う女の子 2,000 名を対象に、学校におけるリーダーシップの経験に関するアンケート調査と、都内私立校を対象に、生徒のリーダーシップを育てる取り組みや教員研修などについて尋ねた調査をまとめたものです。

調査から、中高生の女の子たちが、場を仕切るよりは「サポート役」や「ムードメーカー」と自認する割合が高いこと、生徒会やクラス委員などの経験をした場合、将来リーダーシップをとりたいと考える傾向が高いことなどが分かりました。リーダーシップ育成のために、学校行事やクラブ、生徒会活動などを有効に活用することが求められています。



レポートはこちらから

日本における女性のリーダーシップレポート2022

若者たちが自分で人生を決めるためのプランの活動

職業訓練を通じて未来を切り開く

プランは、若者たちの経済的な自立を促すためのトレーニングにも力を入れています。
今回は各国の事例と、プロジェクトでよく用いられる貯蓄貸付組合の仕組みについて紹介します。

世界では約6800万人の若者（15～24歳）が職につけず[※1]、働くために必要なスキルを身につける機会も多くありません。なかでも若年層の女性たちの機会はさらに限られています。こうした状況を放置することは、長期的には社会全体の貧困につながり、貧困の連鎖を断ち切ることができなくなります。

プラン・インターナショナルは、子どもや若者たちが自分の人生を自分で決めることができるよう、国や地域の状況にあわせてさまざまな支援を行っています。そのひとつが、若者を対象とした職業訓練など生計向上を目的とした支援です。



近年は新型コロナウイルス感染症の影響もあり、医薬品販売のための職業訓練も人気（ボリビア）

CASE 01 TANZANIA タンザニア ムワンザ活動地域

人生が変わり始めたシングルマザー

タンザニアはGDP成長率は比較的高いものの、若者の失業率の高さが問題です。プランは2019年から政府などと協力し、特に若い女性たちの就業能力を向上させるプロジェクトを実施。現地で需要のある配管や機械工などの職業訓練コースを設け、548人（うち332人が女性）にトレーニングを提供しました。

受講者の一人、ローズさんは3歳のときから弟とともに叔父夫婦に育てられました。中等教育の途中で学校を辞め、店員などをして弟を養っていましたが、21歳でシングルマザーとなります。友人からプランを紹介されたローズさんは、貯蓄貸付組合に参加し、配管工の職業訓練を受講。成績優秀者となり、配管工事会社で有給インターンシップの機会を得ることができました。現在では近隣からさまざまな仕事の依頼を受けています。



プロジェクトに参加して、ようやく自分の人生が変わり始めました。これからは、娘をきちんと育て、弟の面倒もみながら、安定した生活を送りたいです。

貯蓄貸付組合ってどんなもの？



プランの活動地域では2004年以降、約150万人が参加しています

貯蓄貸付組合とは、メンバーが定期的に集まって一緒に貯蓄し、その貯蓄から少額の融資を受けるグループのこと。わかりやすく柔軟なシステムのため、識字率が低い地域でも普及しやすく、生計向上や経済的自立につながる有効な方法です。

●どのような人が対象？
村単位、女性グループ、若者グループなどを対象に、15～25人程度で構成されます。

●どうやって貯蓄する？
グループで決めた貯蓄ルールに基づき、メンバーは可能な範囲で少額の貯蓄を頻繁に行います。

●お金を借りることもできる？
グループで決めた借入ルールに基づいて低金利でお金を借り、分割で返済します。

●集まったお金は盗まれたりしない？
通帳に貯金と貸付を記録し、お金は複数の鍵付きボックスに保管されます。近年では金融機関に預けるケースも増えています。

●生計向上以外のメリットは？
お金の管理や生計向上の手段などについて学べるほか、地域内での相互扶助の体制も作られます。また女性が参加することで、女性の地位向上につながることも確認されています。

※1 GLOBAL EMPLOYMENT TRENDS FOR YOUTH 2019, ILO

CASE 02 BOLIVIA ボリビア サンタ・クルス活動地域

母から受け継いだ焼き菓子で、もっと大きなビジネスに

2019年に始まった「夢に届くチャンス」プロジェクトでは、起業や雇用につながるスキルアップにより、若者、特に女性たちの生活環境の改善を目指しています。ボリビアでは主に畜産や食品の生産・加工など、地元の産業促進につながる研修を実施。参加者の多くは経済的に貧しい家庭の若者やシングルマザーで、これまでに1,500人以上が受講しました。



私の夢は、今よりもっと大きなビジネスにすることです。母が残してくれた焼き菓子作りを、子どもたちにも伝えていきたいと思っています。

プロジェクトに参加した24歳のヒメナさんは、8歳と2歳の子どもをもつシングルマザーです。小さい頃から母親の菓子作りを手伝っていたヒメナさんは、自宅の小さなオーブンで作った焼き菓子を販売してなんとか生計を立てていました。SNSでプランのプロジェクトを知り、起業と食品生産のコースを受講。数カ月後には、プロジェクトに賛同する企業や財団から資金提供を受け、機械を導入することができました。生産量を増やして得た利益で配達も始めた結果、受注がさらに増えています。また彼女の子どもたちはプラン・スポンサーシップに登録され、ヒメナさん自身もコミュニティ・ボランティアとして活動しています。

CASE 03 TIMOR-LESTE 東ティモール アイレウ活動地域

農業による経済的自立を目指し、野菜の生産とお金の管理を学ぶ

東ティモールの若者の失業率は12.3％（2019年）で、10年近く高い水準のままです[※2]。そのためプランは、若者が持続可能な農産物の生産と収穫を行う能力を向上させることを目的とした、ユース・エコノミー・エンパワーメント（YEE）プロジェクトを実施しています。このプロジェクトの活動の一環で、村に貯蓄貸付組合を設立し、組織運営や起業などのビジネススキルのほか、ジェンダー課題やリーダーシップなどについて学ぶ機会も提供しています。これまでに参加した1,026人のうち588人が若い女性です。



プロジェクトに参加した若者たちはみな、目的をもって貯蓄やお金の管理をするようになりました。もっと多くの若者に参加してほしいと思います。

20歳のノルビアさんは、プロジェクトでブロッコリーやトマトなど14種類の野菜の生産方法を学んだほか、貯蓄貸付組合の主要メンバーとして運営サポートも行っています。「YEEに参加して収入も増え、家族を養えるようになりました」と語るノルビアさん。プランは農業省と連携し、彼女が所属する貯蓄貸付組合のメンバーと野菜の買い手を結びつける支援も提供するなど、若者たちが確実に自立できることを目指して活動しています。

※2 https://www.statista.com/statistics/813103/youth-unemployment-rate-in-timor-leste/

illustration by Noriyuki Goto

スーダン

女性性器切除から女の子を守る妹を守ったアリアの勇気

アフリカや中東などの約30カ国では、大人の女性になるための通過儀礼として「女性性器切除」(Female Genital Mutilation、以下FGM)という慣習が残っています。約2000年前から続いてきたこの慣習をなくすべく、人々の気づきを促し、考えと行動を変えるためのプラン・インターナショナルの取り組みをご紹介します。



スーダンのホワイト・ナイル活動地域に住むアリアは、15歳の女の子。3年前からプランが運営する女の子クラブで、女の子が経済的に自立するための方法などについて学んでいます。

特に、昔からこの地域に伝わる慣習であるFGMが、女の子におよぼす影響について詳しく学び、「この慣習はなくすべき」だと強く思うようになりました。





アリアには9歳の妹がいます。ある日、母親が妹にFGMの施術を受けさせようとしていることを知りました。「大人になるために必要なこと」「昔からやっていることだから」――そんな理由で、スーダンでは9歳以下の幼い女の子の多くがFGMの施術を受けています。

アリアも8歳のとき、FGMが何かもわからず、でも嫌だと言えずに施術を受け、とても痛く辛い思いをしました。アリアは、妹を自分と同じ目にあわせたくなかったので、なんとかしなくてはと思いました。





アリアは両親に「FGMについて一緒に勉強してほしい」と頼みましたが、話を聞いてくれません。そこでプランのスタッフに相談すると、「まずは地域で影響力のある村長に働きかけよう」ということになりました。

プランは村長に、FGMの弊害とともに、「スーダンではFGMが犯罪である」ことを伝えました。2020年にできた法律により、もし違反した場合には、最長3年の禁錮刑と罰金などの罰則が定められているのです。



村長からの説得によって、両親はプランが開催する研修に参加しました。そこで学んだのは、不衛生な環境での施術は、激しい痛みや、ときに死に至るほどの出血をともなうこと、女の子の心にも体にも消えない悪影響を与えるということです。

FGMは「娘が将来結婚をするために必要なこと」と信じていた母親は、さまざまな弊害があることを知り、とても驚いていました。



アリアの勇気と、両親の正しい理解のおかげで、妹は施術から逃れることができました。今もアリアは女の子クラブで、FGMや早すぎる結婚をなくすための活動をしています。

また、妹とともにアクセサリー作りの職業訓練にも参加しています。「女の子がみんなFGMを受けずに、経済的に自立できる社会になりますように。」それがアリアの願いです。

ガールズ・プロジェクトのご支援をお願いします

● 死に至ることもある慣習
「女性性器切除から女の子を守る」プロジェクト（エチオピア・スーダン）

詳細はウェブサイトをご覧ください



FGM根絶に向け、地域で啓発活動を続ける女の子たちの勇気を後押しします

解説：プログラム部　冨田佳代職員

スーダンでは15歳～49歳の女性の87％がFGM（女性性器切除）を施術されているという統計があります。FGMの弊害について理解もすすんでいますが、「結婚するために必要なもの、昔からみんながやっている当たり前のこと」というような考えが根付いており、FGMをやめる決断をすることは簡単ではありません。

2020年7月から開始したスーダンの「女性性器切除から女の子を守る」プロジェクトでは、12歳～17歳の女の子からなる「女の子クラブ」が中心となり、地域でFGM根絶にむけた啓発メッセージを発信しています。また、保護者や男性、宗教指導者、行政関係者たちとも、FGM根絶にむけ、地域全体でできることを根気強く話し合っています。皆さまの温かいご支援が、「FGMを根絶していきたい、地域を変えていきたい」と強く願い、勇気をもって行動する女の子たちを後押しします。

ラオス

さまざまな困難を乗り越え最終年度! 教育プロジェクトの成果と課題



レポーター：プログラム部
鈴村久美子職員

「少数民族の子どもの教育」プロジェクトは、人口の約89%が少数民族を占める
ラオス北部のウドムサイ県で2019年12月に開始。
新型コロナウイルス感染症に翻弄されながらの活動となりましたが、
プロジェクトの実施期間である3年間の最終年度を迎えました。
活動の成果がさまざまな形で見えはじめている状況を、現地に赴任している鈴村職員が報告します。



ラオスってどんな国?

東南アジアの内陸部に位置するラオスは、1953年にフランスから独立。近年は都市部を中心に徐々に経済成長を遂げていますが、一方で少数民族が多く暮らすコミュニティや山岳地域は貧困や教育格差などの深刻な問題が残っています。



はじける笑顔を見せる活動地域の子どもたち

学校閉鎖の影響を受ける少数民族の子どもたち

ラオス語以外の言語を母語とする少数民族の子どもたちの多くは、ラオス語の授業についていくのが困難で、小学校での留年や中途退学に至る割合が高いのが現状です。さらに新型コロナウイルス感染症の影響で学校がたびたび休校となり、学習の機会が大きく失われています。2022年1月、ラオス政府は、ワクチン接種をすすめながら経済活動や教育を再開する方向に方針転換。学校も再開しましたが、感染を恐れて学校に戻らない子どもたちもまだいます。

こうしたなか、活動の停止や見直し、再開を繰り返しながらすすめてきた本プロジェクトの成果は着実に出始めています。たとえば少数民族の子どもたちへの教授法を実践している幼稚園教師の割合は、プロジェクト実施以前の45%から、2年次終了時には94%に増えました。教師トレーニングを実施し、プラン職員と現地政府職員が教師の能力に応じて個別指導を行ってきた結果です。

また、子どもたちの基礎学力も伸びています。就学準備コースに参加する前は100点満点中18点だった平均点が46点に伸び、基礎的なラオス語の読み書きや計算ができるようになりました。これまでに6つの幼稚園が完成し、子どもたちの学びや遊びに適した学習環境が整備されました。

より多くの子どもたちに教育を届けるために

さまざまな好ましい変化がみられる一方、課題もあります。この地域では、保護者が教育の重要性を理解せず、子どもに家事や畑仕事を手伝わせ、学校に通わせないことも少なくありません。特に学力の低い子どもたちは学校を休みがちであることも多く、保護者の協力が重要ですが、プランが啓発活動への参加を呼びかけても、参加してもらうことが難しいのが現実です。

また、国の予算不足から教師の多くが無給のボランティアで従事しているという課題もあります。生活のために農作物を育てる教師も多く、収穫期などの繁忙期には教師の欠勤が増えます。将来の見通しが立たないために、辞めてしまう教師も後を絶ちません。教育の重要性を村全体が理解し、子どもや教師を支える体制を作っていくことが最終年度の大きな課題です。

鈴村職員の

ラオス駐在日記

2019年12月からプロジェクトマネジャーとして、
ラオスに赴任した鈴村職員。
最近の出来事について〝駐在日記〟で報告します。

2021年 | 8月24日

9月に小学校1年生になる子どもむけの就学準備コースも、いよいよ最終週！ 村には幼稚園がないため、子どもたちは初めてラオス語や数字を学んでいる。コースを実施する学校に到着すると、教室中に響きわたる元気いっぱいなラオス語の歌声。休憩時間には、子どもたちがラオス語の発音を教えてくれた。自信たっぷりに覚えたばかりの言葉を教えてくれる姿が頼もしい。子どもたちの表情から、学校を楽しんでいることが伝わってくる。玩具や教材で遊びたくて、授業開始1時間以上前に登校する子どもも多い。コースで身につけた基礎学力をバネに、楽しみながら小学校にも通い続けてほしい。



歯磨きを含めた生活習慣もコースの中で学ぶ

プロジェクト
参加者のコメント

新しい教室が完成し子どもたちと一緒に楽しく過ごしています



バンナさん
幼稚園教師

これまで小学校の空きスペースを使用して授業をしてきましたが、新しい教室ができたおかげで、幼稚園に通う子どもの数が増えました。学習教材も支給され、園でできる活動が増え、子どもたちも楽しい時間を過ごしています。

【5月に活動報告会を行います!】

5月21日（土）のプラン・ラウンジで、鈴村職員によるプロジェクト報告会を開催します。申し込み方法は、5月以降にウェブサイトをご確認ください。

2021年 | 10月29日

今日は今年度建設した幼稚園3園の引き渡し式。9月に実施予定だったが、郡内での新型コロナウイルス感染症の感染者増加で延期となり、ようやく開催できた。建設した教室が適切に維持管理されるよう、村の代表者と学校関係者へのトレーニングも行った。県を越える移動が制限されているため、首都ビエンチャン勤務の私は残念ながら参加できなかったが、子どもたちが元気に通う姿を早く見たい…。



引き渡した幼稚園の教室

2022年 | 1月10日

秋以降準備に追われていた会計検査がひと段落し、久しぶりの現地訪問。活動地では新型コロナウイルス感染症の影響が残るものの、政府からの許可も下り、活動を再開できた。今回は各学校を訪問し、2年次の成果を評価する。評価結果を分析し、最終年度の活動にいかしていきたい。これからも活動地域の人々やスタッフの安全を守れるよう、感染対策をしながら活動を続けていく。



幼稚園の授業観察を通じて教師の指導力を評価

グローバル・プロジェクトへのご支援をお願いします

● 将来の選択肢を自分の手で広げる

「少数民族の子どもの教育」プロジェクト（ラオス）

※このプロジェクトは、
外務省(NGO連携無償資金協力)の
支援のもと実施しています

詳細はウェブサイトをご覧ください

ゴルフトーナメントを通して環境保護や教育への長期的な支援を実施

「スタンレーレディスゴルフトーナメント」を通して、ケニアの子どもたちへの支援を続けていただいてるスタンレー電気。教育支援にかける思いをお伝えします。



スタンレー電気株式会社
取締役
米谷光弘さん

選手の獲得ポイントを環境や教育のための支援に

スタンレー電気は、自動車機器製品や電子機器製品の製造販売を行う企業です。1980年より主催する女子プロゴルフトーナメント「スタンレーレディスゴルフトーナメント」を通じた、社会貢献活動にも力を入れています。大会スローガンである「挑戦－Challenging the Best」に基づき、ベストオブチャレンジ賞で全選手が獲得したポイントに応じた金額を寄付しています。これまでに、東日本大震災の復興や森林保全活動に取り組む団体へのサポートを行ってきました。

ケニアの子どもたちの学力と健康をサポート

2018年より、世界の子どもたちの教育支援活動として、プランのプロジェクトへの支援を続けています。複数の寄付先を比較検討した結果、寄付金の使途が明確であること、グローバルに貢献できること、独自のプロジェクトを立ち上げて支援できることを理由に、寄付を決定しました。具体的には、「世界の子どもたちの学びを応援」をテーマに、プランが実施するケニアの教育プロジェクトを支援しています。昨年は、過去に建設したケニア南部にある2つの小学校に、教室備品、遊具、および手洗い設備、マスクを支給し、手洗いトレーニングと新型コロナウイルス感染症の啓発活動を実施しました。その結果、子どもたちは安全で衛生的な環境で学習し、感染症に対する予防行動を実践できるようになり、学力と健康状態の向上が期待できるとうかがっています。

このような寄付の成果は、トーナメント実施中にクラブハウス内に特設コーナーを設置して、ケニアで撮影した動画とともに来場者や参戦選手に伝えています。プロアマ大会やトーナメント観戦にご招待したお客様からは、共感や賛辞の声があがっています。また、選手からは「自分の挑戦が寄付に結びつく仕組みが素晴らしい」と、コメントをいただいております。一方、グループ社員には社内報を通して成果を紹介しており、こちらも賛同の声が多いですね。

2019年9月には、弊社から社員2人が現地を訪問し、全校生徒約400人と保護者・教員が集まる落成式に参加しました。そして、子どもたちとシャボン玉や大縄跳びで遊んだり、好きな授業や将来の夢などを聞いたりして交流を深めました。現地訪問により、子どもたちが新しい教室で学べるのを非常に喜んでいるのが実感できました。

支援を継続することが大きな力になる

弊社は、2005年より静岡県裾野市での身体障害者支援活動、2006年よりJLPGAジュニアゴルファー育成活動、2011年より静岡県森林保護活動を行うなど、支援を継続することを大切にしています。裾野市からは、長年の貢献により「有功善行賞」も授与されました。プランを通した教育支援活動も、継続することにより、大きな力になると思いますし、長期的な支援が、子どもたちの夢の実現やSDGs達成につながると信じています。



支給された新しい机で
授業を受ける子どもたち







(上) コース内に寄付を紹介する掲示板を設置 (中) 小学校に設置された記念プレート (下) 落成式の様子

大切なご遺産を“第二の故郷”の学校建設に役立てる

今回は、ネパールにおける教育支援のプロジェクトへの遺贈寄付を決められたMさんにお話をうかがいました。Mさんはご夫婦でネパールに深い縁があり、「ネパールの学校建設のために」という配偶者のご遺志を形にすることを決断されました。



1987年に、ネパールのチャイルドを訪問



狭い教室で学ぶ子どもたち

Q プラン・スポンサーシップで長年ネパールのチャイルドと交流されています。始められたきっかけを教えてください。

1983年に初めて夫婦でネパールを訪れ、物乞いや学校に通わず働く子どもたちを多く目にしました。夫は戦中戦後の混乱のなかで少年時代を過ごしましたので、懸命に生きる子どもの姿が幼い頃の自分と重なったようです。また、当時ネパールの女性の識字率はとても低く、教育支援の必要性を強く感じました。知人から託された古着や文房具を配ったりもしましたが、その場限りの援助にしかならず、専門性や持続性が大切だと感じました。

帰国後、ネパールの子どもたちのために何かできないかと考えているときにプランの新聞広告を目にして、スポンサーになりました。プランはそれぞれの地域の抱える問題に精通していますし、人々の自立を促進する姿勢にも共感しました。私たち夫婦には子どもがいませんでしたので、一人の子どもと長くかかわり成長を見守ることができることも魅力でした。手間暇をかけて書いた手紙をもらったときの喜びは、ひとしお。とても心が温まりました。地球のどこかに文通している相手がいるのって楽しいことですよね。

Q 相続財産からのご寄付を決めたのは、どのような理由からですか?

私たち夫婦はネパールが縁で出会いました。結婚後は、有休を貯めて、毎年、1カ月ほどかけてネパール各地を旅しました。現地の人々から多くのことを教えられ、さまざまな場面で助けてもらいました。夫が病気になり、もう先が長くないと分かった頃、プラン・ニュースで遺贈寄付の記事を見て「こういうのはいいね」と言いました。そこで、ネパールへ行くためにコツコツ貯めていたお金を寄付することにしました。「ネパールの学校建設のために」が夫の遺言です。夫にとっても、ネパールは第二の故郷のような存在だったのだと思います。



プロジェクトが始まる前の校舎



工事がすすむ校舎建設

Q プロジェクトの内容について教えてください。

ネパール大地震で被害をうけた学校への教育支援プロジェクトです。教室の建設だけでなく、フェンス、花壇、男女別トイレ、安全な水の給水設備などきめ細やかな計画を立てていただきました。支援の成果が出るまでには時間がかかるものだと思いますので、ゆっくりと見守りたいです。子どもたちが元気に楽しく安心して学校に通えますよう願っています。

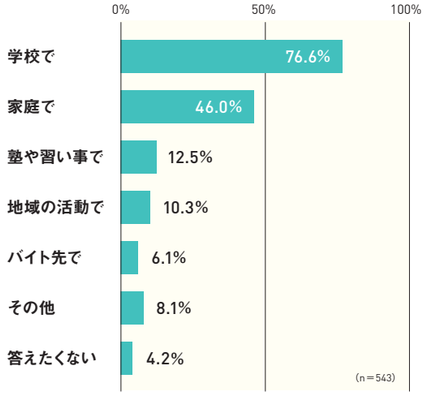
Q 遺贈寄付や相続財産からの寄付を検討されている方へ、メッセージをお願いします。

プランは支援者の思いやリクエスト、寄付額に応じて、いろいろなプロジェクトを提案してくれると思います。私たちの寄付金はわずかなものですが、ほかの支援者の方と協働することで、思い通りのプロジェクトを始めることができました。夫の願いを目に見える形で残せることができ、うれしいです。

アドボカシー

「ジェンダー・ステレオタイプ」に関する調査を実施

Q. ジェンダー・ステレオタイプ的な発言を受けたことがあると回答した場合、それはどこで受けましたか？（複数回答可）



プラン・インターナショナルが実施した
「ジェンダー・ステレオタイプ」に関する調査より

2022年1月に全国の高校生2000人を対象に「ジェンダー・ステレオタイプ」に関する調査を実施しました。ジェンダー・ステレオタイプとは、女性や男性に対して社会で浸透している固定観念や思い込みのことで、当人の価値観やライフステージにおける選択に影響をおよぼすと考えられています。

調査では、「男性は女性よりも強い」など、ジェンダーに関する13の質問を行い、その回答から、ジェンダー・ステレオタイプ強度を算出しました。調査結果から、相対的に男性のステレオタイプが強く、外見や成績など表面的なことや、「結婚」「子どもを持つこと」「稼いで大黒柱になること」といった伝統的な価値観を重視しがちであることが分かりました。一方で、ジェンダー・ステレオタイプが弱い層は、男女平等をより重要だと考え、「習い事」「進学や就職などの進路」などさまざまな選択において、ステレオタイプの影響を受けにくいことが分かりました。

既存の価値観に縛られず、自分らしく生きていくためには、ジェンダー・ステレオタイプから解放される必要があります。しかし、ジェンダー・ステレオタイプ的な発言をむけられたことがあると回答した人の約7割が「学校で」そのような発言を受けたと回答しました。今後は教員への研修や学生自身への働きかけなど、学校における意識啓発の必要性を訴えていきます。

ユースグループ

さまざまなテーマでユースむけ勉強会を開催

プラン・ユースグループは、外部のユースを対象にした勉強会を開催しています。2021年10月には、国際ガールズ・デーを記念して学生団体Youth Gender Studiesとの合同ワークショップ「ユースと話そう！ユースと考えよう！パートナーとの関係性」を開催。パートナーとの対等な恋愛関係に関する調査結果を報告したほか、性的同意や性教育に関する議論を行いました。同じく10月には「性と生殖に関する健康と権利」をテーマに、11月には「スポーツ界にみられるジェンダーバイアス」、2022年2月には「政治におけるジェンダー」や「LGBTIQ+」についてゲストを招へいし、活発な議論を行いました。ご関心のある方はぜひインスタグラムをフォローしてください。



オンラインで行った合同ワークショップ

プラン・ユースグループの
インスタグラムはこちら



カラフルでポップなデザインと、い草の優しい香りに癒されます

COFFEE BREAK　職員が紹介するカルチャー

ホンジュラスで出会った手工芸品「フンコ」

企画管理部　**楢木陽子 職員**

“フンコ”とはスペイン語で「い草」を意味し、その名の通り、い草を編んで作られています。フンコの発祥地、ホンジュラス北西部にあるサンタ・バルバラ県では昔から、い草の帽子が作られていましたが、あるNGO団体が、その技術を地域の女性の生計向上や地域復興にいかせないかと考えました。さまざまな製法やデザインを教えたことがきっかけで、今ではホンジュラス各地のお土産物屋さんで見られるようになっています。



中田さんが、ご自身とプランの職員、メゼレットさんを描いたイラスト

遠い国の女の子の親になりました！

支援を通して社会とのつながりを感じることができます

大学時代に興味をもったエチオピアと日本の交流の一助になりたいと、プラン・スポンサーシップを通じて3年間チャイルドとの交流を続けている中田さんにお話をうかがいました。

スポンサー　**中田香枝さん**
チャイルド　**メゼレットさん**（9歳）／エチオピア

家にこもりがちな生活のなかでも社会と交流を

私は子どもの頃から海外をテーマにした絵本などに興味があり、大学時代は国際貢献サークルで、アフリカに給食の費用を送るための募金活動などをしていました。

社会人として働いていた4年前に体調を崩し、ほぼ家から出ない生活を送るようになりました。そんな状況でも「何か社会と交流できることをしたい」と思ったのがプラン・インターナショナルで支援を始めたきっかけです。大学時代にサークルが一緒だった友人がプランで働いていて、まめに活動を発信していたのが目に留まり、それも後押しとなりました。そして「単なる寄付」でなく、「誰かのリアクションがほしい」「信頼できる団体で」という思いもありました。

エチオピアのチャイルドを希望したのは、学生時代の卒論作成中、1930年代すでにエチオピアからの使節団が来日するなど日本との交流が盛んだった歴史を知り、いろいろな人の尽力があって国際交流が成り立っていることを実感したからです。「今後もその交流が続くように、なにか力になりたい」と思っていました。

特別な気持ちになれるチャイルドからの手紙

交流を初めて3年、6歳だったメゼレットさんが今は9歳に。プランを通して送られてくる写真で、どんどん大人びて成長していく様子がわかります。「あなたは健康のために何をしていますか」という内容の手紙をくれたこともありました。

チャイルドへの手紙では「あなたは勉強もできるようになると思うよ」などの前向きなメッセージを伝えるようにしています。

2021年に結婚したのですが、結婚式から帰宅すると、ちょうどメゼレットさんからの手紙が久しぶりに届いていました。「おめでとう」と書いてあり、宛名も私の名前だけでなく「ディア スポンサーファミリー」となっていて、特別な気持ちになりました。

衣食住が足りていても人や社会とのつながりがないと、心もとなく感じるものだと思います。その点、家にいても社会に対してアクションを起こすことができているので、メゼレットさんとの交流は私にとって励みになっています。

女の子の立場が弱いエチオピアの現状が心配になることもありますが、今まで通りさまざまな節目にメッセージを送り、交流を続けていきたいです。





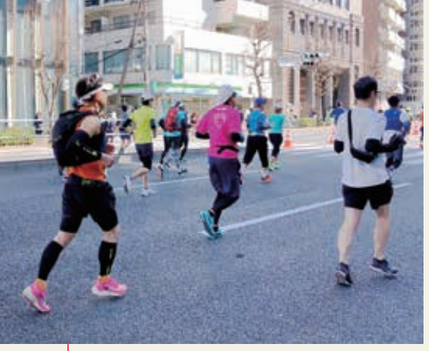
（上）9歳になったメゼレットさん（下）交流開始当時、6歳のメゼレットさん（写真中央）と家族



メゼレットさんからの手紙。文字は代筆ですが、手形が描いてあります

中田さんとメゼレットさんのこれまでの交流記録

- 1月（2019年）：交流スタート。メゼレットさんにお手紙を送付
- 2月：メゼレットさんから初めてのお手紙が到着
- 3～11月：この間、メゼレットさんと4往復ほどお手紙をやり取り
- 4月（2020年）：メゼレットさんから6通目のお手紙が到着
- 6月：活動報告レポート「1年の歩み」が届く
- 7月：カレンダーキャンペーンからお手紙を出す
- 4月（2021年）：「1年の歩み」が届く
- 7月：バースデーカードを送付
- 11月：メゼレットさんから、中田さんの結婚を祝福するお手紙が届く



東京マラソン2021のチャリティランナー

東京マラソンRUN with HEART
公式ウェブサイト
https://www.runwithheart.jp/

東京マラソン2021 プランのチャリティランナーが出走！

昨年秋から延期となっていた東京マラソン2021が、3月6日に開催され、プランのチャリティランナー47名が東京の街を走り抜けました。この２年余り各地でマラソン大会の中止が相次ぎ、ランナーの皆さんは実際のレースの機会を失っていたにもかかわらず、「世界の女の子に生きる力を！」という思いを温めながらトレーニングを積んできました。そしてついに、目標のフィニッシュラインを駆け抜けたことに、私たちプラン職員の感激もひとしおです。来年の東京マラソン2023チャリティでもプランのチャリティランナーが走ります。どうぞ引き続きエールをお願いいたします！

プラン・インターナショナルは東京マラソン財団チャリティ RUN with HEART の寄付先団体です

不用品で寄付できる、新しい仕組み「モノドネ」

「モノドネ」は東海・関西を中心にリサイクルショップを展開する株式会社買取王国が、2021年10月に立ち上げた新しい寄付の仕組みです。「お金ではなくモノの寄付で社会に貢献しよう」がコンセプトで、社会貢献活動を行うさまざまな団体から寄付先を選んで不用品を郵送すると、査定金額すべてが選んだ団体に寄付されます。リサイクルに携わってきた企業だからこそ、「不用品を捨てるのではなく再利用することで寄付につながるようにしたい」、という思いから始まった「モノドネ」。このたび、プランも寄付先団体として「モノドネ」のウェブサイトに掲載いただきました。



詳しくは下記サイトをご覧ください
https://monodone.com/detail/22/

オンラインでも参加できる「SDG4教育キャンペーン2022」

「SDG4教育キャンペーン2022」は、SDGsのゴール4（教育目標）を達成するための世界規模のキャンペーンです。日本では、2003年の開始以来、延べ58万人以上が参加し、昨年は3,896人が参加しました。今年もプランは実行委員メンバーとして企画立案・実施を他団体との協働ですすめます。国内外の教育課題に取り組み、教育環境の改善をするために、一緒に政府に声を届けませんか？

参加方法：(1) 意見や提言を送る
(2) 子どもロビイングに参加する
(3) 授業やワークショップを実施する
実施期間：2022年4月1日（金）～5月31日（火）
詳しくは、公式サイトをご覧ください
https://jnne.org/sdg2022/



皆さまのご参加をお待ちしています

あなたも参加しませんか？

プラン支援者の会からイベント開催のお知らせ

「プラン支援者の会」は、全国各地の支援者の皆さまにより任意で運営されています。
「ほかの支援者のみなさんと話がしたい」「志を同じくする方々と楽しく活動がしたい」とお考えの方、
お近くのプラン支援者の会に参加してみませんか?

プラン・インターナショナルのウェブサイトから、各会のページにリンクできます　https://www.plan-international.jp/supporter/plankai

多摩SP会 f　**映画観賞会「ソニータ」**

- 日時：4月23日(土)14時～16時(13時30分受付開始)
- 内容：映画鑑賞後、感想をシェアして意見交換をいたします。
- 連絡先：矢島　Mail：tama-web3@ngo-npo.org
- 会場：立川市子ども未来センター　立川市錦町3-2-26
- 参加費：1人300円　※要事前申込

※新型コロナウイルスの感染状況によっては断りなく中止となる場合があります。

■ 支援者の会に関するお問い合わせ先：
プラン・インターナショナル支援者の会担当 Mail: P-kai@plan-international.jp

※「プラン・ニュース」No.120は、2022年7月上旬にお届け予定です。

プラン・スポンサーシップをご支援くださっている皆さまへ

チャイルドへのお手紙をお待ちしています！

手紙送信フォームでチャイルドへのお手紙をお書きくださった皆さま、ご利用ありがとうございます。手紙送信フォームにはお手紙の例文や、季節に合わせた便せんデザインを用意しております。まだご利用になっていない方もぜひお試しください。また、「こんな便せんがあったらいいな」などのご要望があれば、お聞かせください。

インターネット環境のない皆さまには、引き続き郵便のお手紙（葉書、カード、写真含む）をお預かりいたします。定型サイズ、25g以内（84円 ※2022年1月現在）の郵便で、今まで通り事務局の「チャイルドへの手紙」係までお送りください。なお、発送までに数カ月のお時間をいただく場合があります。

また、チャイルドへお送りいただくギフトは今後、設定した期間内のみの受付とさせていただきます。詳しい時期や内容については、今後ウェブサイトや機関誌「プラン・ニュース」でご案内いたします。

お手紙書きのヒントは
こちら
https://www.plan-international.jp/supporter/br/



1月には日本の冬を感じる写真を添えてくださる方がたくさんいらっしゃいました(画像提供：埼玉県・M様)

住所などのご登録情報の変更はお早目にお手続きください

春は引っ越しのシーズンです。住所やメールアドレスなどのご登録情報に変更があった方はぜひ変更手続きをお願いいたします。皆さまに事務局からのお便りや、寄付金控除のお知らせを遅延なく、確実にお届けできるようにご協力をよろしくお願いいたします。

お電話でのお問合せ：03-5481-6100
（月～金　9:00～17：30　土日祝を除く）

マイ・プラン・ページのアカウントをお持ちの方

マイ・プラン・ページにログインの上、ご変更ください
https://www.plan-international.jp/paonline/login.php

マイ・プラン・ページのアカウントをお持ちでない方

ウェブサイト内、「お問い合わせフォーム」より、ご変更ください
https://www.plan-international.jp/inquiry/inquiry.php

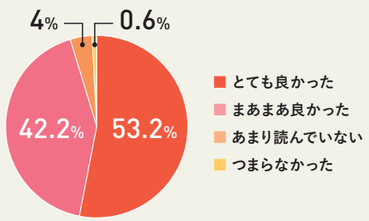
プラン・ニュースのアンケートへのご回答ありがとうございました

2021年10月に発行した「プラン・ニュース118号」に関して、オンライン読者アンケート実施しました。1,000件以上の回答が寄せられ、95％の方から「良かった」との回答をいただきました。アンケートへのご協力、ありがとうございました。

国際ガールズ・デー特集のサヘル・ローズさん特別インタビューには「サヘル・ローズさんの心から寄り添ってくれるような温かな言葉が印象的」などの感想をいただきました。また、グアテマラの女の子が農業で起業を目指すストーリーをイラストで紹介したガールズ・プロジェクトも人気でした。

具体的なご意見もたくさんいただきました。今後実現できる部分を反映させたり、新たなテーマなども取り入れながら、「皆さまとともに作るプラン・ニュース」を目指します。今号もアンケートを実施いたしますので、ご意見をお寄せください。

■ プランニュース118号の感想をお聞かせください



■ 印象に残ったページ TOP5

1	特集 サヘル・ローズさんインタビュー	65.6%
2	ガールズ・プロジェクト	57.3%
3	プラン・スポンサーシップ	42.1%
4	グローバル・プロジェクト	35.5%
5	企業連携（豊島株式会社）	27.9%

プランニュース119号のアンケートはこちらから

経済的自立を目指す女の子たち

プラン・インターナショナルの活動地域から

活動地域では、女の子の教育や就労の機会が限られていることが多く、人々が貧困から抜け出せずにいることが大きな問題となっています。女の子たちが自分の人生を自分で決めることができるようになるために、プランは職業訓練の機会を提供しています。必要な技術を身につけ、職を得たり、自ら起業することができた女の子たちをご紹介します。

Dominican Republic



環境に配慮した養蜂場の立ち上げ

26歳のポーラさんは、若者のエンパワーメントプロジェクトの起業家トレーニングに参加し、仲間4人と養蜂場を立ち上げました。周囲の生態系に気を配りながら運営し、植物の栽培や食料生産につなげています。



Benin

自分のお店を開くことを夢みて

看護師になりたかったワキラさんは、15歳で妊娠、学校を中途退学しました。女の子たちの再教育や雇用を支援するプランのプロジェクトに参加し、化粧品を売るお店をもつことを目指しています。

Guatemala



病気を克服し、畜産を副業に

過去にうつ病を患ったパウリナさんは、パン屋を経営しつつ、羊の飼育で副収入を得ています。職業訓練を通して「畜産のためのスキルだけでなく、自尊心の大切さと立ち上がる自信を学んだ」と語っています。

Indonesia



友人6人と農業で起業

20歳のジェネテさんは、グリーンスキル・プログラムで学んだ農業技術をいかして、友人とともに起業しました。「得た利益で大学の学費や生活費もまかなえるようになりました。スマートフォンも購入できて満足です。」



Bangladesh

事業とボランティアで女の子たちを支援

13歳で結婚をさせられそうになったシリンさんは、進学したいと両親を説得しました。現在は、生理用品の製造・販売をしながら、早すぎる結婚などの理由で女の子たちが中途退学しないようにサポートを続けています。

Ghana



優れた木製品を生み出すスペシャリスト

20歳のバルチスさんは、プランの職業訓練で大工や建具技術を習得し、小さな工務店のオーナーになりました。現在は「木のお医者さん」というニックネームで呼ばれ、2人の弟子に技術を伝えています。

プランのSNSをフォローしてください

プラン・インターナショナルのFacebook、Instagram、Twitterで活動国の情報や事務局の日々のあれこれを発信中！

※「国際NGOプラン・インターナショナル」で検索してください。



表紙写真ストーリー

笑顔がまぶしい女の子は、P4でもご紹介したタンザニアの職業訓練に参加したソリサさん。幼い頃に孤児となった彼女は小学校を中途退学し、病気がちな叔母の世話をしながら暮らしていました。その後、プランの職業訓練で仕立ての技術を学び、29歳で自分のお店を持ちました。「職業訓練に参加して私の人生は変わりました。洋服を作る仕事に誇りをもっています。今とても幸せです。」

ご意見、ご感想をお寄せください

プラン・ニュース119号アンケート

PLAN NEWS
2022 SPRING NO.119

表紙写真：タンザニア

公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン
〒154-8545 東京都世田谷区三軒茶屋2-11-22 サンタワーズセンタービル10F
TEL：03-5481-6100　FAX：03-5481-6200
www.plan-international.jp
※ご連絡はウェブサイトの「お問い合わせ」フォームよりお願いいたします。